

保育者養成課程における音楽教育方法に関する研究（2） －弾き歌いの学習におけるポイント制導入の効果－

神原雅之
(児童学科教授)

岡林典子
(児童学科教授)

石田純子
(本学非常勤講師)

井上まゆみ
(本学非常勤講師)

奥戸雅子
(本学非常勤講師)

谷 善子
(本学非常勤講師)

富岡順子
(本学非常勤講師)

丹羽ひとみ
(本学非常勤講師)

稗方攝子
(本学非常勤講師)

山本浩美
(本学非常勤講師)

本稿では、本学児童学科の授業「児童音楽Ⅰ」において筆者らが取り組んだ弾き歌いの実践を取り上げた。特に、ピアノ学習初心者が弾き歌いの技能を獲得することは、心身ともに大きなハードルとなる。そこで筆者らは、2019年度から弾き歌いの練習に主体的に取り組む行動を促すためにポイント制を導入した。ポイント制では、楽曲の難易度に応じて1～5点を付した。学生に任意の楽曲を選んで練習し、30ポイント以上の獲得を目指すように求めた。ここでは弾き歌いの成績に及ぼすポイント制の効果について検討した。その結果、弾き歌いの成績とポイントの間にやや強い相関が認められた。また、ポイントの効果は、弾き歌いの成績上位者に強く、その一方で成績下位者に弱く作用したことがわかった。これはポイントの目標設定が低かったことに因るものと考えられた。この点の検討が必要である。

キーワード 音楽実技 弾き歌い 動機づけ 主体性 ポイント制

1. はじめに

保育者の養成課程の多くで、ピアノを用いた弾き歌いの実践に取り組んでいる。一般的に幼児を対象とした実践の中で弾き歌いを行う機会は少なくない。その傍らで、保育者を目指す学生の音楽能力は多様である。特にピアノ学習初心者が弾き歌いの技能を獲得するのは大きなハードルとなっている。こうした状況を鑑みて、保育者養成機関では弾き歌いの能力獲得について、さまざまな取り組みが行われている。

金指(2009)は、保育実習における弾き歌いを行う場面の調査やそこで求められる能力などについて検討している。西海ら(2017)や小田

切ら(2018)は、ピアノ弾き歌いの演奏にコード奏法を導入する試みを報じている。深見他(2009)、中平他(2010)は、弾き歌いの能力の獲得を目指してeラーニングを導入した実践を重ねている。コロナ禍の中でオンラインを用いた弾き歌いの授業を模索された報告もある(足立2021、葛西2021)。このほかにも弾き歌いの能力を高めようとするさまざまな取り組みが行われている。

本学科では「児童音楽Ⅰ」の中で弾き歌いの指導を行っている。2020年1月頃から全国的にコロナ感染が蔓延し、大学授業は大きな影響を受けた。そこで筆者らは、オンラインによる

弾き歌いの指導を試みた（2020～2021年度）。その概要は既に報告した（神原他 2022）。本稿はその続編である。筆者らは、保育者を目指す学生が主体的に弾き歌いの学習に取り組もうとする行動を促すためにポイント制を導入した。この種の報告はまだみられない。ここではポイント制導入の報告を行い、その効果について検討を加える。

2. 「児童音楽Ⅰ」の概要と弾き歌いの取り組み

2-1 児童音楽Ⅰの概要

本学児童学科における音楽関係の授業は、4年間の大学生活において学生が乳幼児の音楽の成長に寄り添うことが出来るような学びを得ることを目指している。必修科目と選択科目を合わせて、1年次から4年次までに複数の科目が配置されている（表1）。ここで取り上げる弾き歌いの指導は「児童音楽Ⅰ」（表1の★）の中で行っている。この授業では、保育者として必要な音楽に関する基礎的知識と音楽技術の獲得を目指している（保育士資格取得必修科目）。

本授業を履修している学生の音楽能力はさまざまである。例えば、ピアノ学習が未経験の者からある程度弾ける者まで多様な学生が含まれている。ゆえに、この授業では音楽能力の異なる学生一人ひとりの要望に応えられるような内

容を整備する必要がある。

この授業は、2コマ連続（90分×2コマ＝180分）で開講している。履修学生数は概ね100名である。そこで履修学生を3つのグループ（A、B、Cの3グループ）に分け、180分を60分ずつの3つの時間帯に区切り、各グループをローテーションして3つの内容（弾き歌い、歌唱、音楽理論）を展開した（表2）。担当教員は10名であった。

初回の授業：全15回の授業の内、初回はオリエンテーションを行い、授業展開の方法について説明した。楽曲一覧表（ア）、レパートリーシート（イ）の2点を配布し、加えてテキスト（ウ）の確認を行った。詳細は以下の通り。

(ア) 楽曲一覧表：楽曲一覧には、各楽曲を演奏するための目安となるように、難易度に応じて1～5点のポイントを付した。学生には、この一覧表を手掛かりにして、自分の能力に応じた楽曲を選択し、練習に取り組むように求めた（巻末資料A）。

(イ) レパートリーシート：練習の軌跡を残すために「レパートリーシート」を配布した。学生には、毎回の授業に向けて取り組んだ楽曲名をこのシートに記入し、15回目の授業時に提出するように求めた。（巻末資料B）。特に初心者には30ポイント以上を目

表1 本学児童学科の音楽関係授業（2022年度）

セメスター	授業科目	
1	児童表現学 ピアノ・ベーシック A	必修 選択
2	幼児と表現 ピアノ・ベーシック B	必修 選択
3	児童音楽Ⅰ★	必修
4	保育内容演習（表現）	必修
5	音楽遊び	選択
6	児童音楽Ⅱ	選択
7	音楽応用演習Ⅰ	選択
8	音楽応用演習Ⅱ	選択

表2 3つのグループの授業ローテーション

グループ	A	B	C
学生番号	1～36	37～72	73～107
14:45～	音楽理論 （楽典） （教員1名で 担当）	歌唱活動 （教員1名で 担当）	弾き歌い （教員8名で 担当）
15:50～	弾き歌い （教員8名で 担当）	音楽理論 （楽典） （教員1名で 担当）	歌唱活動 （教員1名で 担当）
16:55～	歌唱活動 （教員1名で 担当）	弾き歌い （教員8名で 担当）	音楽理論 （楽典） （教員1名で 担当）

指すように伝えた。

(ウ) **テキスト**：弾き歌いの練習のために2冊のテキストを用いた。一つは、『改訂 幼児のための音楽教育』（教育芸術社発行）、もう一つは『子どものうた弾き歌いベスト50』（音楽之友社発行）である。楽曲数は、それぞれ107曲、55曲、合わせて162曲が収められている。

弾き歌い練習の留意点：オリエンテーションの際に、弾き歌いを練習するときの留意点について話した。つまり、①歌詞を明瞭に語るように歌う、②音楽の流れを止めない、③歌が浮き立つように歌唱とピアノのバランスに留意すること。加えて、弾き歌いのレパートリーを増やすように促した。

中間発表と最終発表会：授業の8回目と15回目には、弾き歌いの発表会を行った。発表会は平素の練習成果を披露する機会とした。8回目に中間発表、そして15回目の授業時に最終発表会を行い、学生はそれぞれ2曲を演奏した¹⁾。2つの発表会の実施方法は同じであるが、最終発表会では弾き歌いを演奏する前に、幼児向けの言葉がけを含む「導入部分」を演じるように求めた。

2-2 学生の実態

2021年度の授業終了後に行った調査から、本学学生の音楽経験の実態についてみてみよう（神原ほか2022）。

- ・履修学生の約75%は大学入学前にピアノの学習を経験している。その内訳は、「ブルグミュラー程度」(27.4%)が最も多かった。「ソナチネ程度」以上は約30%であった。まったくピアノの学習体験の無い学生は25%であった（図1）。総じて、ピアノ学習初心者が多いことがわかる。
- ・弾き歌いの練習を「とても頑張った」「頑張った」と回答した学生が97%と高い数値を示した。
- ・ピアノの週あたりの練習時間は平均144.4分であった。「ピアノ履修経験なし」の学生の平均は121分、「履修経験あり」の学生の平均は152分であった（図2）。

2-3 ポイント制の導入と学習意欲

本学の弾き歌いの授業にポイント制を導入したのは2019年度からである。ポイント制は、学生一人ひとりが能力の違いに応じて主体的に弾き歌いの練習に取り組むことを期待して導入した。2019～2020年度は「楽曲一覧表」にあ

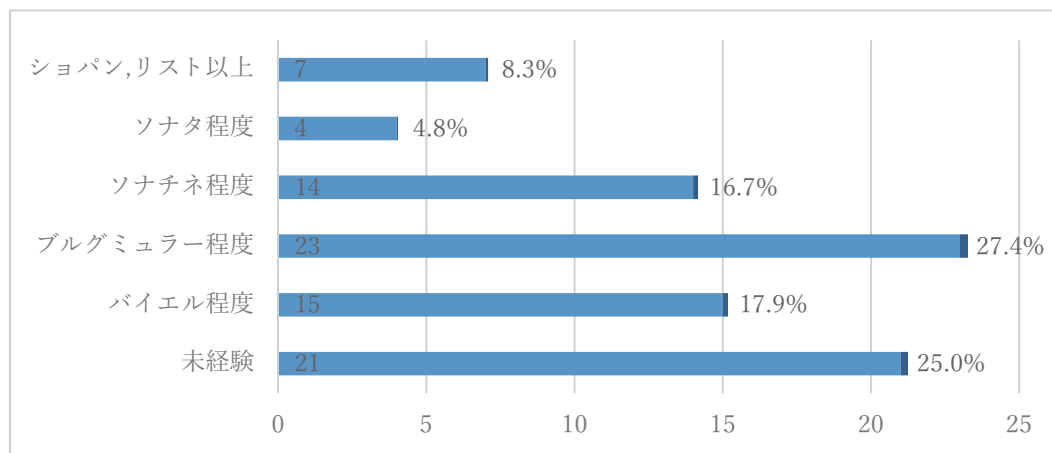


図1 ピアノ学習経験の内訳 (N=84)

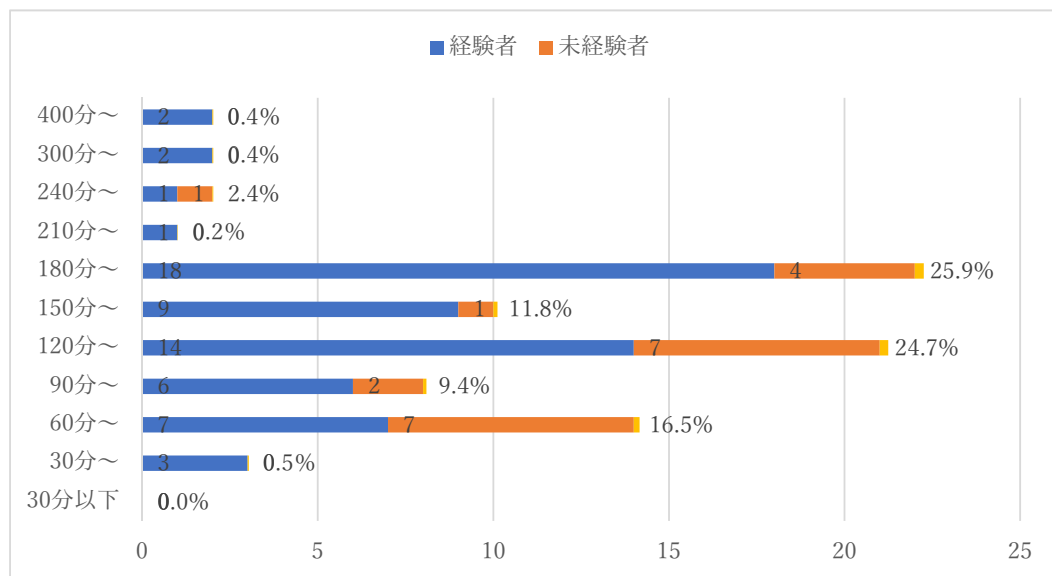


図2 1週間あたりのピアノ練習時間 (N=84)

る各曲に付したポイント（1～5点）を調整し、学生の取り組みの様子を見守った。2021年度の授業終了後にアンケートを行い、ポイント制の導入について学生がどのように受け止めているか調査した（神原ほか2022）。その結果から、ポイント制に関するところを抽出し、以下に箇条書きする。

- ・目標として設定した30ポイントを大きく超えてポイントを重ねた学生が多かった(図3)。
- ・ポイント制の導入が練習の動機づけとして役立ったかを尋ねたところ、75%の学生が「とても役立った」「役立った」と回答した(図4)。つまり、ポイント制の導入は弾き歌い練習の動機づけとして効果が期待されることが示唆された。

3. 弾き歌いにおけるポイント制導入の効果

3-1 目的

本授業では多様な音楽学習経験をもつ学生が混在して履修している。そこで、学生が自分の能力に応じて、主体的に弾き歌いの練習に取り組むための一助としてポイント制を導入した。ここではポイント制の導入が弾き歌いの成績に

どのように影響しているか、その基礎的なデータを得ることを目的としている。

3-2 方法

対象者：「児童音楽Ⅰ」を履修した学生107名。

内3名はデータの不備があったので対象から除いた。したがって、分析対象としたのは104名であった。

対象時期：2022年度第3セメスター（4月～7月、全15回の授業）で弾き歌いに取り組んだ。

手続き：ここで分析に用いたデータは、次の2種類である。

一つは弾き歌いの成績点である。全15回の授業の内、8回目と15回目に弾き歌いの発表会を行った。学生は弾き歌いを2曲演奏し、その発表を教員（複数名）で採点した。ここで用いた成績点は、8回目と15回目に発表したものの平均点（100点満点）である。

もう一つは、グレードポイント（GP）である。対象者には、毎回の授業のために練習した楽曲をレパートリーシートに書き留めるように求めた。予め配布した楽曲一覧には、楽曲の難易度

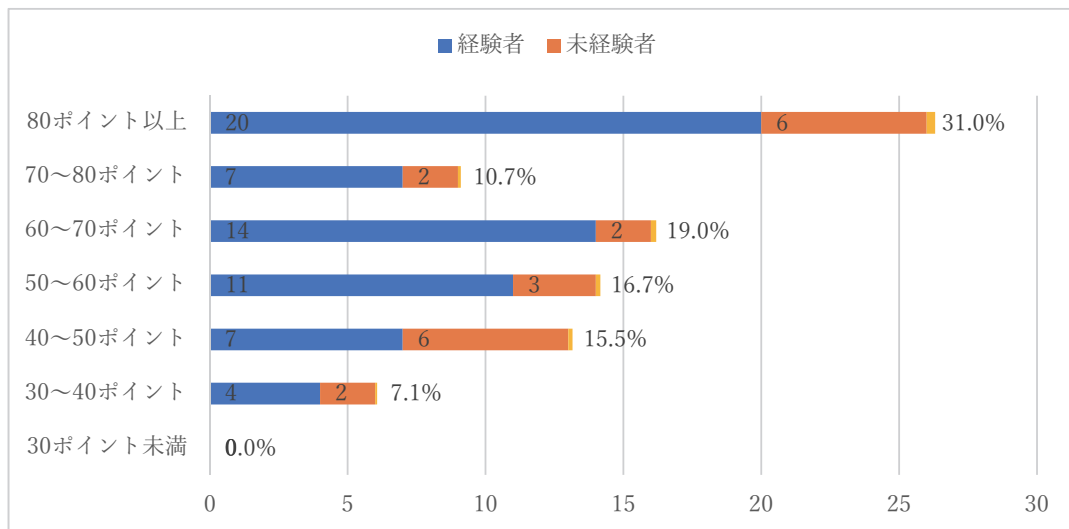


図3 履修者が獲得したグレードポイント (N=84)

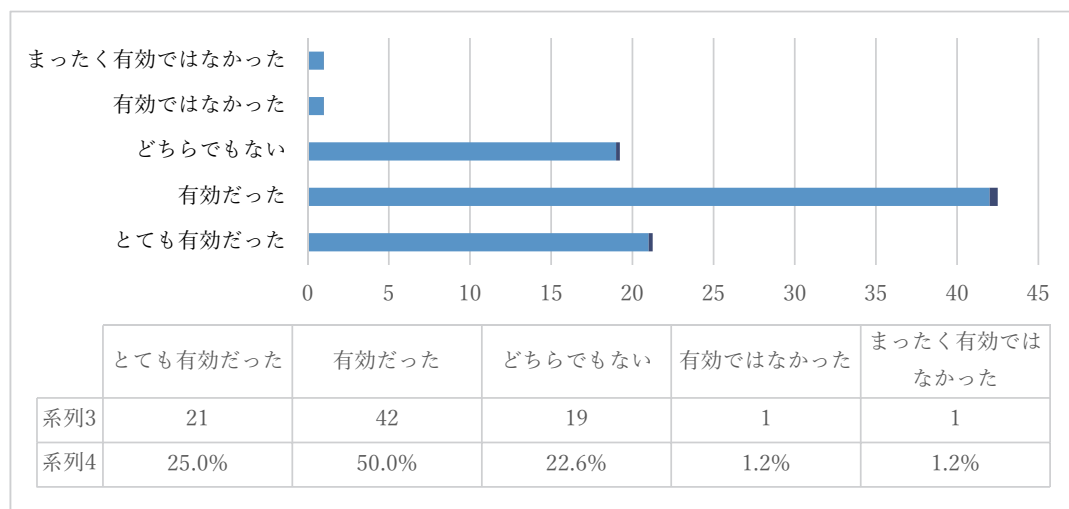


図4 「ポイントを加算していくことは弾き歌いの練習を行うための動機づけとなりましたか」 (N=84)

に応じて1～5点の得点が付されている。ここで用いたGPは、レポートリーシートに記された楽曲得点の合計得点のことである。

3-3 結果

結果を見てみよう。弾き歌いの成績の全体平均は76.04（標準偏差5.67）であった。また、GPの全体平均は81.08（標準偏差38.12）であった。全員がGPの最低目標である30点を超え

ていた。

弾き歌いの成績の平均とGPの平均を基準にして、それぞれ平均よりも高い得点をとった者と低い得点をとった者の4群（A群～D群）に分けた。各群の弾き歌いの成績を表3に示した。

表3 成績平均と GP 平均による 4 群の成績

ト イ ホ イ ト ー ン グ	M=81.08	A 群 N=10 M=73.60 SD=3.03	C 群 N=32 M=82.52 SD=3.44	
		B 群 N=37 M=71.68 SD=3.27	D 群 N=25 M=79.58 SD=2.91	
	0	M = 76.04		100 点

備考) A 群：GP は高いが成績は低い
 B 群：GP も成績も低い
 C 群：GP も成績も高い
 D 群：GP は低いが成績は高い

4 群間の平均値の差の検定を行った (F 検定)。その結果, GP の主効果が認められた ($F(1,102) = 13.98, p < .01$)。また, 弾き歌いの成績の主効果も認められた ($F(1,102) = 147.85,$

$p < .01$)。交互作用は認められなかった (ns)。そこで, いずれの群間に差異があるのか明らかにするために多重比較を行った。その結果を表 4 に示した。ここに示されているように, A 群と B 群の間には有意な差は認められなかったが, その他の群間には 5% 水準で有意な差が認められた。

表 4 4 群間の平均値の差の多重比較

	A 群	B 群	C 群	D 群
A 群	—	—	—	—
B 群	1.97 ns	—	—	—
C 群	-4.73 *	-7.13 *	—	—
D 群	-4.58 *	-6.65 *	3.21 *	—

* $p < 0.05$

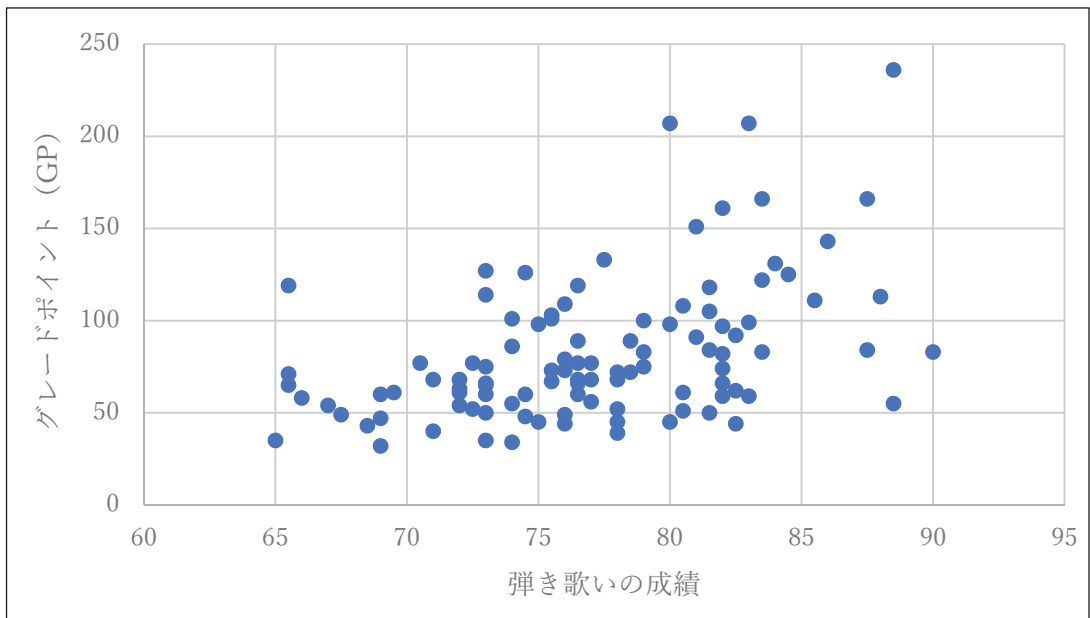


図 5 弾き歌いの成績とグレードポイントの散布図 (N=104)

成績と GP の相関：被験者全体の散布図を描いた (図 5)。この散布図を基に相関係数を求めたところ, やや強い相関が認められた ($r(102) = .45, p < .01$)。

GP 順による 3 群の成績比較：ここでは, 全被験者 (N = 104) の GP の得点を基準にして上位群, 中位群, 下位群の 3 群に分け, 各群の弾き歌いの成績を比較した。その結果を表 5 に示した。

表5 GPによる3群の弾き歌いの成績

	上位群	中位群	下位群
N	30	44	30
M	79.95	76.61	74.95
SD	5.33	5.25	5.70

3群間の平均値の差について検定したところ、各群間に有意な差が認められた ($F(2,101) = 3.09, p < .01$)。そこで多重比較を行った(表6)。その結果、上位群と中位群の間に5%水準で差が認められたが、中位群と下位群の間に有意な差は認められなかった。

表6 多重検定の結果(Steel-Dwass)

	上位群	中位群	下位群
上位群	—	—	—
中位群	2.65*	—	—
下位群	3.24*	1.26 ns	—

* $p < .05$

3-4 考察

1) 散布図が示唆するもの

ポイント制の導入は、弾き歌いの練習に対する学生の主体的な行動を促す要因となるか分析を試みた。その結果、弾き歌いの成績とGPの間にやや強い相関が認められた(図5)。つまり、弾き歌いの成績向上に一定の効果があることが示された。しかし、この効果については慎重に捉える必要がある。被験者の中にはGPは低い成績が優れている者(表3のD群)、一方でGPは高いが弾き歌いの成績が低い者(表3のA群)もいる。このことは、ポイント制の導入が一様に効果をもたらしているとは言い難いことを示唆していると考えられる。

特に留意する必要があるのは、GPが伸びず、成績も芳しくない者(表3のB群)である。弾き歌いの成績が低いのは、どこにつまずきがあるのだろうか。つまり、つまずきは技術的な問題(読譜、運指、表現法)なのか、教材や練習法の問題なのか、また別の問題なのか検討が必要である。

もう一つ、GPの目標設定が低かったことが学生の練習意欲に効果をもたらさなかった一因となったのではないかという点である。つまり、2021年度と2022年度はコロナ禍の中で練習環境をうまく整えられない初心者の学生の心情等を考慮して、GPの目標を「30点以上を目指すように」求めた。一部の学生(例えば表3のB群・D群)は、この設定が低いと感じられていたのではないか。課題として残るところである。

2) GPの導入と弾き歌いの成績

被験者をGP順に3群に分け、各群間の弾き歌いの成績を比較した(表5,表6)。その結果、上位群と中位群の間に有意な差が認められた。これはGP導入の効果を示していると言えるだろう。しかし、中位群と下位群の間には有意な差は認められなかった。つまり、GP導入の効果は下位群よりも上位群の方に効果的に作用したと考えられる。GPの適切な目標設定について検討が必要である。

4. おわりに

筆者らは、弾き歌いの授業においてポイント制を導入した実践を行ってきた。本稿ではその効果について検討した。音楽能力獲得のためには、質(音楽的な表現)と量(レパートリー楽曲を増やすこと、練習方法の工夫など)の両面を顧慮する必要がある。一般的に、質を重視すると量(曲数)が限られるし、その一方で量に重きを置くと質が疎かになる。概して、音楽教師は、音楽的な質の追求に重心を置く。一方、初心者の多くはレパートリー(楽曲数)が増えると、ある種の達成感を味わう。このような観点から、GPの導入によって学生自身が主体的にレパートリーを増やそうとする行動をとるであろうことを私たちは期待した。今回の分析結果は、GPの導入によってある程度の効果があることが認められたが、すべての学生の意欲を喚起することには繋がっていないこともわかった。この点を改善していくためには、GPの適切な設定について検討すること、加えて練習過程における学生のつまずきについて検討する必

要がある。以下、これらの点に関する気づきを書き留めておきたい。

- ・弾き歌いのスキル獲得のためには、基礎的な音楽能力、教材（読譜・運指・表現法）、適切な助言（教師・仲間の支え）など、さまざまな要件について検討が必要である。そして、学生自身が能動的な学習態度を生み出しているような環境（プログラム）作りが求められている。
- ・ピアノ練習の意欲を引き出すための一つの鍵は、周囲に居る人（仲間・教員）の存在である。4手や6手による連弾などの体験は、音楽能力の異なる者同士が協働して、学ぶ楽しさを味わう好機になると思われる。
- ・音楽学習は何をゴールとするのか留意したい。それは学習者自身が感じる達成感、充実感、自己実現、幸福感などであろう²⁾。そこに辿り着くためには、平素の音楽体験（音楽能力の差異にかかわらず）が楽しいと感じられること、自分の成長を実感することが重要である。それによって学生自身が主体的に学び続ける態度を育むことに繋がると考えられる。今後も継続的に探究していきたい。

註

- 1) 学生自身が選んだ3曲の曲目を発表会の2日前までに提出するように求めた。発表会当日、学生は自身が演奏したい楽曲を1曲、残りの2曲から当日教員が1曲を指定し、計2曲を演奏した。
- 2) 近年注目されているウェルビーイング (well-being) の概念は参考になる。

文献

- 足立広美 (2021) 保育者をめざす学生の『ピアノの弾き歌い』の指導法に関する研究 (3): オンライン授業における『ピアノの弾き歌い』の課題及び配慮すべき点についての一考察, 創価大学教育学論集, 73: 15-26
- 小田切舞美, 篠崎智, 山本優子, 山下彰子 (2018) 保育者養成課程におけるコードネームによる弾き歌いの学習: 保育の視点からの考察, 東京家政大学教員養成教育推進室年報, 5-1: 83-90
- 葛西健治 (2021) 子どもの歌のピアノ弾き歌い指導におけるオンラインレッスンの試み: コロナ禍の授業実践における成果と課題, こども教育宝仙大学紀要, 12: 1-16
- 金指初恵 (2009) 弾き歌いに関する一考察: 教育実習事前指導の観点から, 埼玉学園大学紀要 (人間学部篇), 9: 197-206
- 神原雅之, 岡林典子, 石田純子, 井上まゆみ, 奥戸雅子, 谷善子, 富岡順子, 丹羽ひとみ, 穂方攝子, 山本浩美 (2022) 保育者養成課程における音楽教育方法に関する研究: コロナ禍における「児童音楽 I」の授業を中心に, 京都女子大学発達教育学部紀要, 18: 167-176
- 神原雅之, 鈴木恵津子 (2019) 『改訂幼児のための音楽教育』, 教育芸術社
- 中平勝子, 赤羽美希, 深見友紀子 (2010) プレンデッドラーニングを取り入れたピアノ弾き歌い指導の改善, 日本教育工学会論文誌, 34: 45-48
- 西海聡子, 笹井邦彦, 細田淳子 (2017) 保育者養成における弾き歌いのためのコード伴奏法, 東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学, 57: 59-68
- 深見友紀子 (2011) 『子どものうた弾き歌いベスト50』, 音楽之友社
- 深見友紀子, 中平勝子, 赤羽美希 (2009) ピアノ弾き歌いにおける遠隔・非対面指導の効果と課題, 京都女子大学発達教育学部紀要, 5: 31-40

付記

本稿の執筆は、神原と岡林が全体構成および執筆を担当した。推敲は執筆者全員で行った。

資料A 配布した楽曲一覧とポイント

楽曲一覧とポイント

Page	『改訂 幼児のための音楽教育』	G.P.
31	チューリップ 作曲:井上武士 作詞:近藤宮子/日本教育音楽協会	3
32	ちょうちょう 作曲:ドイツ民謡 作詞:野村秋足	4
33	春がきた 文部省唱歌 作曲:岡野貞一 作詞:高野辰之	4
34	めだかの学校 作曲:中田喜直作詞:茶木 滋	5
35	おはようのうた 作曲:河村光陽 作詞:田中忠正	3
36	朝のうた 作曲:本多鉄磨 作詞:増子とし	3

資料B 学生に配布したレポートリーシート

2022年度【児童音楽I】レポートリーシート

[学籍番号]		[氏名]	
回	期日	楽曲名	Grade Point
1	4月12日	オリエンテーション	
		・グループ分けについて	
		・テキストについて	
		・練習の仕方ほか	
2	4月19日		
3	4月26日		